

令和4年度 第2回学都松本子ども読書活動推進委員会 議事録

日時：令和5年3月1日（水）10：00～11：30

場所：松本中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

豊嶋委員長、上條副委員長、三ツ井委員、谷口委員、越高委員、清水委員、小岩井委員

事務局：小西中央図書館長、大月館長補佐、百瀬主査、永春主事

【次 第】

1 開会

2 館長あいさつ

お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

様々な活動に影響を与えていた新型コロナウイルスですがようやく区切りがつきましたので転換点を迎えられるそうです。強い制限の中で講座やイベントを何とか実施しようとしてご尽力いただいたサポーターの皆様には感謝申し上げます。

サードブック事業につきましては、要望書の提出など後押しをいただきましてなんとか学級文庫方式で令和5年度から実施予定となりました。選書にもご協力いただきありがとうございました。

子どもが主人公として学都松本の進化に挑む松本市にとってぴったりの事業が叶ったのではないかと考えております。多くの大人が関わりながら子どもたちの読書活動を支えて生きたいと思っておりますので よろしく申し上げます。

令和5年度は第3次計画策定という大きな作業があります。間に合うかどうかうすうす危機感を感じておりますが、すぐに取り掛かる必要があると思っております。継続するものにつきましては、効果や検証をしっかり行い、未来プランと整合性も考えながら委員の皆様からたくさんご意見いただいてさらに良い計画にしていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

3 委員長あいさつ

皆さんこんにちは。本日はありがとうございます。日頃より活動にご協力いただきありがとうございます。館長のご挨拶とおりますはサードブック事業の令和5年のスタートについて、今日報告できることを大変うれしく思います。同じく、今日の推進委員会を経まして主に第3次策定の中で2次を検証し、どうしていくかというところが、また次の段階で大事だと思います。今日報告を受けお話しすべきことと第3次に向けての課題であること、ご意見を整理しながら今日の時間を共にしたいと思っております。よろしく申し上げます。

4 議題

(1) 報告事項

【報告事項1 令和4年度 学都松本子ども読書活動推進事業報告】

事務局：説明

D 委員：スキルアップ講座では一番最後に講師をしましたが、本当にスキルアップしたい方と、「始めただけど、こういう世界があるのか」と思う参加者との断層が激しく、参加者がどういうものを求めているのか講師として戸惑いました。探り合いながら話す面があり、もったいなかったと感じました。

講座の組立てですが、全体にどうしても手遊び、パネルの制作、紙芝居など細かい部分になってきているのですが、一番の子どもの本の肝というか、一番大事なのは本を選ぶ目だと思います。選書に対してどういう本を選んで子どもに伝えたいと思っているのか、どの講座にもそれが感じられなくて、そういう意味ではスキルアップでこんな細かい部分をやっていたらパンクしてしまうのではないかと思います。実際に本を読みあう、基本的になる本を読んでもらうとか。本当に基本のきが抜けていると感じます。

ブックスタートに子ども読書推進サポーター（以下サポーター）が来ますが、赤ちゃんの童歌や赤ちゃんがどんなものを求めているか、ブックスタートのときにどのように赤ちゃんを本の世界に誘うか、きちんと講習しないとブックスタートに出ても前から知っている人はいいいですが、初めての方は難しいのではないかと。ベテランは子どもの求めているものを適切にアドバイスできるが、初めての方は、「良いですよ」というアドバイスだけになる。これだけ長い講座をやるのだから、おはなし会よりもブックスタートをどういうふうにするか、赤ちゃんのことをきちんとわかることがこれから後の読書活動で大切だと思います。ぜひ内容の組み替えを移行していただきたいと思います。

C 委員：今D委員がおっしゃったことと被るのですがボランティア養成講座の内容的には枝葉のところを中心になっている。体系的にまず絵本のことを学んでもらう講座が必要だと思います。おはなし会もノウハウに注視するのではなく、絵本論、絵本の歴史など、絵本全体をまずは知る必要があると思います。子どもにおはなしを届けるのは大事な目的の一つですが、参加者が自分の中で核になるものをまず学んでもらいたい。例えば講座をしたら、この本は持ち帰って読んできてとレポートしてもらいたいし、学びの場になって欲しい。ノウハウは単発の講座でやってもらえばいいと感じます。

委員長：2次計画が出来あがった時点でボランティア養成講座とスキルアップ講座、図書館の考え方を含め相談しながら実現できたことを評価したいと思います。

今までこういう学びの場はなかった。ボランティアを登録性にし、読書仲間を増やしていくということだと思いますが、必ずしも本に興味のある方ばかりではない。社会貢献をしたい、ご自身を活かしたい、子どものために何かしたいという温かい気持ちのみで参加された方は大勢います。けれどもそういう人を排除するのではなく、そういう方も内包しながら子どもの応援団を増やしていきたい。いまいただいた意見はごもっともだと思います。自身も講座を担当しながら、考えてきたことでもあります。

一点だけ、読み聞かせの基本や後半のプログラムやグループワークのときブックスタート、セカンドブックの本は読んできて、その中から選んできてくださいという組立てをすでにやっています。そういうことは考えつつ行っています。

また本に造詣のない人も居心地よく楽しく活動に向かっていけるような空気を作ることも一方で大事だと思います。応援し励まし、子どもに本を届けることの意味や絵本の素晴らしさを体感していただきつつ、3次にむけては、絵本の真髄を学べるような仕組みが必要だということは自身も思いますので3次に向けての継続審議、議論とさせていただきたいと考えますが、これについていかがでしょうか。

A 委員：自分の中にある核を学んでほしいというのは確かだと思います。集まってくれる人がどんな人かというところが大事です。20年前はもっと人が多く、今はコロナウイルスの影響があるのか、学ぼうと来てくる人が少ない。だからその人たちの気持ちを大事にしたいということも分かります。

サードブック含めここまでよくできたと思います。あとは3次に今回足りなかったところを活かしたい。これからも考察が大事だと思います。

この6回の講座に関しては私が受講していないので何も言えなくて申し訳ないです。

D 委員：来年交代でもいいから委員みんなで受講すればいいのでは。

委員長：いずれにしても現状ボランティアは増えてきています。その方たちが活躍する場がコロナで非常に限られて、令和5年以降いろいろな面でボランティアの方たちにどう活躍してもらうのか考え直していかなければなりません。

毎年ボランティアを養成することが目的ではなく、松本市の子ども読書推進にいかに関与して自分自身も活かしながら活動していただくことが重要だと思います。

います。

例えばボランティア養成講座を隔年にして、もう隔年の方を、子どもの本の真髓のようなことを学べる絵本講座とするのか、ついている予算をどうより良い方向に事業運営していくか。それは3次計画の段階でよろしいでしょうか。

スキルアップ講座に関しては、読書に造詣があるなしに関わらず、子どもの読書の可能性や幅広い年代へのアプローチや、より学びを深める意味において、さまざまな視点を持っていただけているとは感じています。

【報告事項2 令和4年度 第1回～第3回作業部会の報告】

事務局：説明

委員長：質問はございますか。

(質問なし)

委員長：補足です。本の選定についてアンケートが行われました。その結果や図書館の児童サービス委員によりABCセットが選書されましたところ、第1回作業部会ではまとまりきれず、都合3回行いました。3回を経てどうだったのかA副委員長にお聞きしたいです。

A委員：3回出しましたが、最終的に忌憚のないご意見を言い合えたと思います。最初は司書の皆さん特に遠慮されていましたが、何度も部会を重ねるにつれて、「これは譲れない」という皆さんの意見が聞けて本当によかったと思います。

学校の先生も現場にいないと分からないこと、「びゅんびゅんごまを一年生がつくるから使いたい先生はここでびゅんびゅんごま読むんです」という情報だとか、「英語の本もこの程度なら一年生に必要」など、忌憚のない意見がでました。学校の先生が出してくれたのだからそれを尊重しようというのがあって、すったもんだありましたがとてもいい選書ができました。

他県のリストも出してくださって、そこに遜色のない選書で、松本市で出しているのか誇れるものか最終チェックしてもらいました。Dさんによると本の値段が上がるので全部調べていただき相当な労力を使いました。こういうものができて良かったと感じているし、これでも足りないところは必ず2年後くらいに出てくるので、またこの先見直させていければと思います。自画自賛過ぎるのですが。

委員長：ありがとうございます。D委員からも。

D 委員：なんというタイミングで選書会議があったんだと思いました。本の値上げの大ラッシュ。問い合わせるとみんな「金額が違う」、「変わるので在庫停止」などいろいろなことを言われました。本のリストを見たとき、どうなるのかなとくらくらしていたら、案の定金額が上がりますと。一番極端なのは1200円の本が2000円になるとのこと。1日半かかってやっと全てのところから返事がきました。出版社が血眼になっているこのタイミングで選書があったから、また2、3回目にかわったらどうしようと思いました。

学校の先生が会議に出るうちにはっきり意見が出てよかったし確証がえられた。あと図書館員たちはとてもまじめで、例えば化学だったらこの分野とこの分野を入れないといけないというような選書をしていた。子どもにとって何が必要なのかどんどんみんなできて忌憚のない意見が聞けました。実際の一年生がどうなのか先生からも話が聞けて、初めて本を見るという、そういう場があって本当によかったなと思います。

これからどんどん変わっていくと思いますが、大変だろうなという山が思いつくだけでもたくさん見えます。例えば5クラスあるのに3セットしかこなかったらどんなふうに分ければいいか。本の修理といっても図書館に戻してまた修理するより新しい本が来るほうがうれしいでしょうとみんなで言いました。そうではなくても先生にご苦労かけるがみんなで説得していく。みんなでテープ貼りなおしてではなく、私たちもできるだけサポートするからお願いしますと説得して話していくとか。本当にサードブックここまでたどりついたなど、図書館の方たち力を合わせてここまで乗りきってくださったのすごいなと思います。ありがとうございました。

委員長：3回かかったわけです。やればやるほど選書がよくなったと実感したし、皆さんも感じたと思います。選書が一番大事なので、最初と比べ見違える選書になりました。

当日現場では「これは入れてほしかった」、「外されちゃった」、「これいいの?」という個々の思いはそれぞれにあると思いますが、全体としてこれを採用しようと全員で決められたのは成果だったと思います。

これまで図書館だけががんばって選書していたものについて、正直あだこうだという外野の声を耳にしたこともあるので、そうだとすれば図書館、委員、学校司書の先生と3者でつくったところに一番の信頼と喜びと、これを参考にしていこう、というスタートの気持ちが違うなと感じています。

D 委員、A 委員がおっしゃったとおり、これからが大事です。松本の子ども読書推進は学校連携が足りないと思っています。サードブック事業をいいきっかけにしながらますます学校と連携して、互いに協力して子どもたちのた

めにいい形にしていきたいと思います。

【報告事項3 サードブック事業について】

事務局：説明

委員長：皆様思うところがあるかと思いますが、まずはご質問ご意見等いかがですか。

D 委員：図書館、学校の先生、司書の人も大前提を確認してスタートしたいです。説明をする際、子どもたちを学校へ歓迎する気持ち、みんなを待っていたという温かいメッセージをピカピカの本を渡すことによって伝える。その最初となる目的を子どもたちに手渡し、確認していかないといけないと思います。大前提となる目的が分かっているならば、例えば1、2冊本が傷んでしまっても、どうするんだという意見は出ないと思います。目的をとにかく言わないと、違う方向に行ってしまう。

ボランティア活動を活用しとあるが、せっかくサポーターがいるのだから、小学校に入ったことがある人が行った方がいいのではないか。小学校に行ったことがない人たちがボランティアで急に行っても本を紹介するのは無理です。講座の中でもそういう人が多かったです。ボランティアではなく、学校経験のあるサポーターが行くべきだと思いました。

それと、附属や私立はいつから入れるのですか？

事務局：団体貸し出しは令和5年度中に整備して貸し出しをご案内したい。団体の担当と確認したのですが、才教学園や信州大学附属は団体登録が無いので。なので、4月に司書が集まる司書の会があるのでそういう場で広報をしていきたいと思っています。

D 委員：5月から始まるわけじゃないんですね？市立の方は5月からですよ？

事務局：私立はいつからは決まっていない。できるだけ早くカードをつくってほしいと呼び掛けて借りていただく。

D 委員：それも趣旨を誰かが話しに行った方が良い気がする。

委員長：2月議会で決まったばかりなので、事業の周知と働きかけをしていく。そしてなるべく早期に私立も実現していくということでもいいでしょうか。

ボランティアについて、現在90数名います。その人数を動かすのは難しい

し、始めたばかりの人もいますから技術にも差があります。ここ（サードブック事業の運営）に簡単にボランティア活用を明記することに危惧がある。サポーター制度があって、それなりのスキルがあって有償活動をしてもらっているなか、その方たちを活用いただきたいと令和4年度中にも申しあげました。人的予算措置がつかなかったと聞いています。諦めるのではなく、初年度図書館員で頑張ってもらって、事業を見直していく中でいずれサポーターを活用したいということをここでしっかり確認しておきたい。ここにボランティアと書くと、今後ずっとボランティアでできることはボランティアでやってくださいということになる。それを踏まえて、ここにボランティア活用を明記することは避けるべき。

ボランティアが有料で動いてもらえるのかということが一つ。

それから学校の中でもボランティアさんが読みに来てくれる学校があります。現状の書き方ではそこが不明瞭です。まずはこの事業の趣旨・目的を分かっている図書館として事業にあたっただき、そこにスキルのあるサポーターに必要に応じて今後加わってもらうということを目指すべきではないか。個人的な考えですが他の委員さんはどうですか。

B 委員：こういう大きな活動が本当に時間と労力がかかっていると痛感しています。ありがとうございます。ボランティアなど言葉は後にして、大前提を理解して確認を出来る方をこの会として送りますと。

公民館でもボランティアやっている方多いですが、そういう方たちと一線をひけるような名称を考えていくのが良いのでは。

それともう一つ。さきほど本を汚破損したらどうするかという話ありましたが、いただいた本とはいいますが、学校の本は全部市からいただいている本です。そういうことを考えると、本を読むことを一番大事にいただければと思います。

これだけのことが動いたというのが素晴らしいなと思います。子ども達が本を好きになるきっかけの本はあるんでしょうね。なんでもというわけではない。私もお店行くときありますが絵本のコーナーに行ってもどれがいいかは最初わからない。詳しい方も先生も含めて指導する場として動いていただければ大変ありがたいです。いずれにしてもありがとうございました。

F 委員：皆様の迫力に負けます。これだけ真剣に、先生や司書の方々交えて選んでいただいた、その思いが子どもたちに伝わるにはサポーターなり、それなりの橋渡しをする方が必要だと思います。すごい事業をやっているなと思います。

教室に設置する場合に入れ物まで考えているか、机に置いてどうぞでは寂し

い。さらにグレードアップして、学級文庫なりの本棚やスペースなり我々で面倒みてあげたいなという思いがあります。

事務局：ボックスについて、コンテナを予算の中で用意したい。なんとかします。

委員長：なんとかする、ということでそういうこと（備品等）にも予算がつかなかったということです。

今後もそれ（備品や人的予算）を必要だと続けて言っていかなければいけないと思います。

3セットでも4クラスあれば、箱は4つ用意してほしいとお願いしてあります。

E 委員：今日出てきた話の中で温度差はこれからも大きな課題になると思う。せっかくボランティアをしたいという気持ちがあっても、きちんと学びを深めてもらいたいという気持ちをあまり熱く語ると、相手が避けてしまうということを何度も体験している。

ボランティアの中で年齢差が出てくると、若い人にはなかなか伝わりにくい部分があります。読み聞かせのインストラクターをしているのですが、自宅に1000、2000冊、絵本を持ち毎日のように読み聞かせをし、効果をお伝えしている方たちも、良い絵本とはどういう絵本かという問い合わせをいただきました。どう説明すれば伝わるのかということに困ってしまっていて、私自身、絵本論、絵本の歴史、図書館の歴史など文学的なつくりや技術的な評価を重ねてきましたが、それを伝えても良い絵本というのがなかなか伝わらないのではないかと思います。自分達と違った感性で触れている部分があって、旧来の私たちが良い本だと思っていたものがすんなり入っていかないと強く思っています。そうした育児をしているママさんたちが日常的に触れているものはSNS。一番シェアが多いのはInstagramといわれていますけれども、Instagramにはたくさん絵本のリストがある。多くの現役のママさんはそこから情報を得ていると強く感じています。Instagramにあがっている中では、この絵本のリストにあるような本はあがってきていません。こういうものがほぼなくて、書店に身近に並んでいるものがあるんですね。

それが増えれば増えるほど一方で危機感を持っている方たちも増えてきていて、読み次がれた絵本のリストをもっと見えるところに出さないと、と出てき始めています。一方でさっきの講座やビジネス観点からいくと、童歌に関するビジネスが生まれています。おうちビジネスというインストラクターも出てきています。その内容は、おうち遊びや手遊びについてとか学びと平行して企業支援もくっついてきたりしている。どういう絵本が良い絵本ですかと聞かれ

たとき、自分の研修のまとめを読み直しながらどうしたら伝えられるか考えたり、たまたま先日大阪国際児童文学館に勤めていた仕事仲間に出会ったので、現在良い絵本をどう伝えたらいいかと相談してみたが、「そういう人たちは学んでないよね」といいますけれども、学んでないというより学んでいる部分が全然違う。なかなか今まで私たちがしてきたアプローチしてきた表現では伝わりにくい。そこを大事にしたいが強ければ強くするほど、排他的になる部分も出てくる。今後学んできた人たちの活かす場所をきちんと確保しながら、今後ちょいボラ的な感じで社会で活動していきたい方たちもどれだけ包んで巻き込んでいくかというのが大事になるのでは。早く考えていけないといけない部分。

さきほど値段の高騰についてうかがって、子どもたちが自宅で本が買ってもらえないという実状が増えます。電子書籍についても、絶版は電子書籍しか残っていないようなものもあります。ビジネス関係においても電子書籍で本を出版するというのが当たり前、ビジネス書を電子書籍で読むのが当たり前という時代になってきている。国が電子マネーにとりかかるということもあって、お金の概念がそもそも存在しない。お釣りの概念が子どもたちに無い。それくらい大きく変わろうとしている中で良い絵本を伝えて培ってきた文化を維持していくような活動としてこれからのボランティアさんを育成したり、今までの学びを薄っぺらくするのではなく、良い感じで伝えていければと思います。それは図書館司書の専門性に響いてくると思います。専門の人に聞くよりSNSを開いた方が速いということになってしまう。リアルでお会いして参加して学んだことが良い形で市民に伝わるといいのではないかと思います。

サードブックで子どもたちが手に取る本は親御さんたちがなかなか手に取るような本ではないと思うので、そこで出会えるというのは大事なことだと思いつつ聞かせていただきました。

委員長：サードブックのボランティア活用については書き方を工夫していただいて。

一方、学校単位で活動しているボランティアさんの方々には十分に周知してサードブックの本を活用いただきたい。一学期当初ボランティアさんが学校に入るときにその学級文庫の本を読んでくださるといいなと期待します。

図書館の登録ボランティアを事業として派遣するというのは時期尚早。ボランティアがふさわしいのか非常に疑問が残りますので再度ご検討をおねがいします。

図書館の職員数は本当に少ない。新しい事業が増えれば仕事が増えるわけですね。そうするとサードブック事業に関わらず、サポーターを活用していくことで費用対効果はあるし、職員の仕事量の軽減にも繋がる。サポーターはどんどん活用していくべきだと考えます。上手な予算の配分を考えてほしい。サ

ポーターはやはり増大する職員の業務負担を減らすためでもあるし、サポーターのスキルを市民の方のために活用するという意味でもとても良いことだと思いますので、引き続き検討をよろしくお願いします。

F 委員：今私は田川小学校で読み聞かせやっていますが、昨年報償費が入りました。公民館のコミュニティースクール事業と連携をとって、読み聞かせ活動をした際コミュニティースクール事業の予算から報償費が出ることも考えられるのではないかと。

D 委員：それはいいアイデア。

委員長：いいアイデアだと思います。同様のことをやったことがあります。このコロナ禍で予算の使い道についてどうかなどについても聞いておりますので、ある話ですね。第3次に向けて今後検討したい。そういう連携もとても大切なので良いご意見をいただきました。

D 委員：資料にあります調布と松本市、分館数が同じなのに職員数が松本市は少ない。調べてみたが人口比と世帯数が同じなのに調布は174人いて松本市は74人しかいないということをみんな知らないと思います。

あと公共図書館職員の研修が少なすぎるのではないかと。公共図書館員がプロとしてのスキルを身につけるのにも勉強しなければならない。ボランティアもいいですが、職員が勉強できる環境をぜひ整えてほしいです。職員ができるとボランティアさんも落ち着くと思います。少ない人数の中では急務。人数少ないけどすぐ答えてくれる人がいれば少ない人数をカバーできると思います。館長にはお願いしてほしい。サードブックについてスペシャリストを育ててほしいんです。図書館の中にサードブック事業のことを聞けばわかるスペシャリストを2人くらいはつくってほしい。異動もあるかと思いますが。相談窓口のような人を、今回を契機につくってほしいのですが皆さんどうですか。

委員長：先日図書館協議会に、この会の代表として出席してまいりました。図書館協議会で各事業について、サードブック事業に関わらずチームをつくって、責任者を決めて長年勤めている非正規職員の方の力も活用していけるような図書館になれば、今の正規職員の方の負担も減るしスキルも活かされる。サードブック事業については正規職員だけで抱え込まず、長年勤めてきていただいた職員に活躍してもらえるような仕組みづくりに期待したいです。3次に向けても合わせてともに考えていきたいと思っています。

最後に一つだけ。図書館協議会で協議会長がおっしゃっていました。ブックスタートは良いですが、セカンドブックとサードブック事業の名称について、これは自治体的な考え方で、「本のプレゼント3回目だから、サードとしているけど、6歳が3回目の本との出会いではないでしょう」とおっしゃいました。サードブック事業には魅力的なサブタイトルをぜひつけたい。上田市の「本はともだち」しかり、松本市では赤ちゃん向けが「こんにちはえほん」です。現在セカンドブックは「なかよしえほん」。サードブックには例えば「ほんはともだち」「ほんとなかよし」とか、端的な事業名をつけてその事業名をサードブックとともに発信していただきたい。

図書館協議会からの意見です。

【報告事項4 学都松本子ども読書活動推進事業の今後の進め方】

事務局：説明

(意見なし)

(2) その他

【令和5年度セカンドブック事業の子ども読書推進サポーターの活用について】

事務局：説明

(意見なし)

5 委員からの意見

F 委員：中央図書館での本の福袋をやっておりましたので、孫5歳と小学生3年生にとお借りしました。2人とも非常に喜んでいました。中身を想像させる一文、包みに書いてある一文がとても素敵で、何の本だろうかと楽しんで読んでいました。非常にいいアイデアで楽しませていただきました。ありがとうございました。

委員長：嬉しい声ですね。図書館の方からはありますか。

事務局：特にありません。

委員長：最後に1分程度、委員の皆さんからいかがでしょうか。

C 委員：この委員会に加わったときサードブック話題でしたが、どうなるかわからない状態の中で、今回このように軌道に乗ったのはご苦労様でした。市との調整もありだったかと思いますが、本当にうれしく思います。皆さんおっしゃったとおり、人が交代してもスムーズに引き継がれていくように図書館の中で整えていただければと期待しています。私たちも力をお貸しできれば喜んで協力いたします。

学校側も先生方の理解がまちまちになるかと思っています。市からもらったというだけの認識になってしまうなど、残念なケースも出てくるかと思っています。「松本市の方で予算がついて、みんな本が好きになるように、みんなで考えてくれてここにたくさんの本があるから読もうね」と声掛けができるように先生方の理解も深めていただきたいと思います。

D 委員：ここに来ている校長先生方はこのサードブックにご理解があるかと思いますが、先生に理解が浸透していくのは、このコロナ禍の多忙の中では本当に難しいと実感しています。でも主役は子ども、子どもたちのためにできることは力を出そうよと何回も確認しながら楽しく活動ができれば良いと思います。ここまで推進できてすごいと思います。さまざまな方の力を借りて助けてもらうのは良いことだなと実感しました。本当にご苦労様です。

E 委員：ありがとうございます。サードブックができあがってきたことが一番うれしいです。5月以降ですよ、届けられるのは。実際に5月までに絵本を読んで待たせておくような時間がたくさんあって、1年の先生からは5月になるまでは大量に絵本を教室に貸し出すということがよくありました。今年は3セットしかないのに5クラスというところもあってダメかと思いますが、来年からは待たせるような隙間時間にこういった本が手元にある、身近にたくさんあればいいと思いました。ありがとうございます。

B 委員：大きな事業が形になるということは本当に大変なことがたくさんあるのだと思いますが、本当にありがとうございます。これだけの本があるにもかかわらず、本屋さんからアドバイスをもらうというチャンスがないですよ。発信の機会がなんらかの形でたくさんあるとママさんたちは興味があるとします。読書は一人活動なので、一人で本読んでいてかわいそうではなく、一人で本を読んでいて偉いねと褒めてもらえる世の中になっていくといいかなと思います。大変勉強させていただきました。ありがとうございます。

A 委員：コロナ禍で暗いイメージなどがたくさんありますが、5月から小さいプレゼン

トが市内の小学校に贈られる、それが希望になれたらと思います。

SNSの話ありましたが、SNSでオススメの絵本を調べると、えっ、と思うような絵本が入っていて、そして選んでそれきりですよ。サードブックに関わっている中で、時のテストを経て残ったものが大事であり、それが変わらない真実だと思いました。新しいものがないわけではないということを伝え続けなければならないと思います。良い勉強になりました。

委員長：皆さん今日も本当にありがとうございました。あわせてサードブック事業が始まることも、子どもたちのためという事業の目的を軸に、ぜひマスコミ等にも発信していただきたいと思います。この委員会ができたことによって学校、活動者、本への思いや造詣のある方たちがともに手を繋いでことにあたれたことでセカンドブックに次ぐサードブックのスタートは画期的です。公共とともに手を携えているからできるもので、一個人ができることからすると、本当に大きな力で主役の子どもたちの読書がもたらす豊かな時間に寄与できることだと思います。今後も皆さんと手を携えて子どもたちのために、本への愛情を持っている人たちの輪を広げていきたいと思いました。

閉会

以上